（1）地区別基本設計の位置づけ

地区別基本設計とは、各施設の基本・実施設計に先立ち、適切な時期に、九州大学新キャンパスマスタープラン2001（以下「マスタープラン」という）、パブリックスペース・デザインマニュアルに基づき、各地区（ブロック）単位で行うものである。

地区別基本設計では、地区全体の配置計画（各施設、道路、駐車場、オープンスペース等の配置計画）、および各施設の概略設計等を行う。

（2）農学系地区基本設計の役割

農学系地区基本設計は、マスタープラン、パブリックスペース・デザインマニュアルをふまえ、隣接する工学系地区及びセンター地区、理学系地区に引き続き行う地区別基本設計である。

この「農学系地区基本設計　計画説明書」において提示する項目の構成フローを下記に示す。

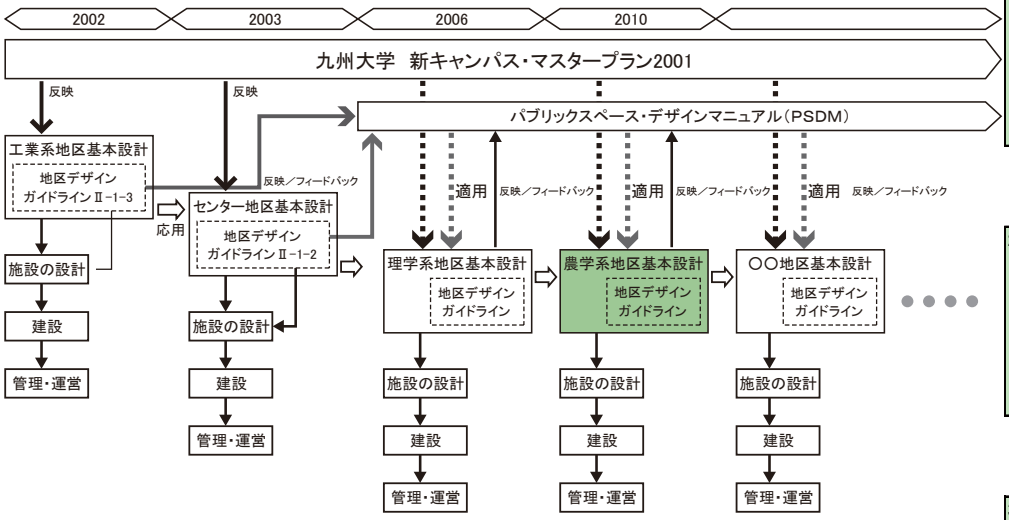


図1-1-1　マスタープランをふまえた研究教育施設の整備の進め方のイメージ

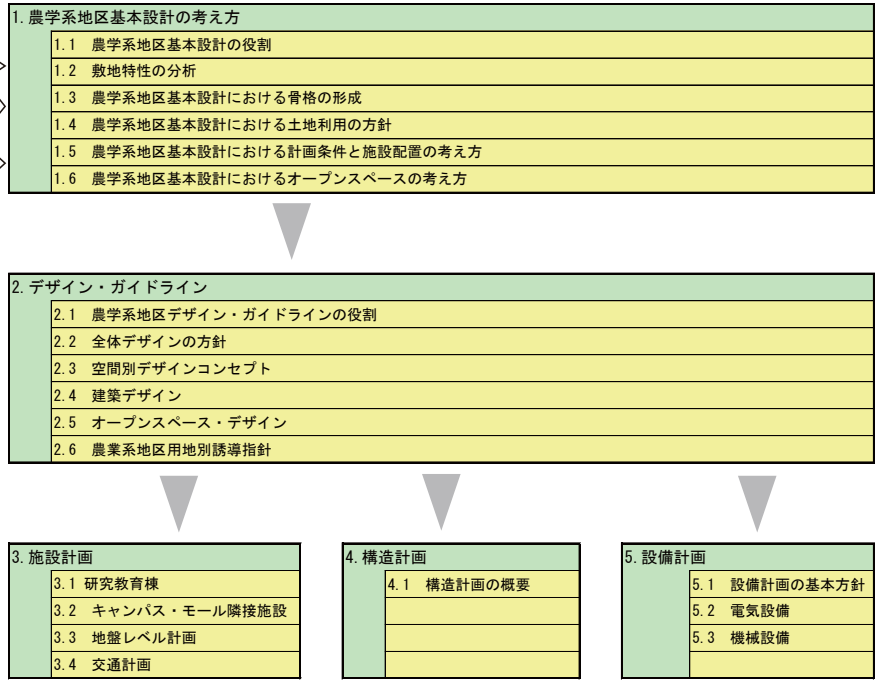


図1-1-2　農学系地区基本設計の構成

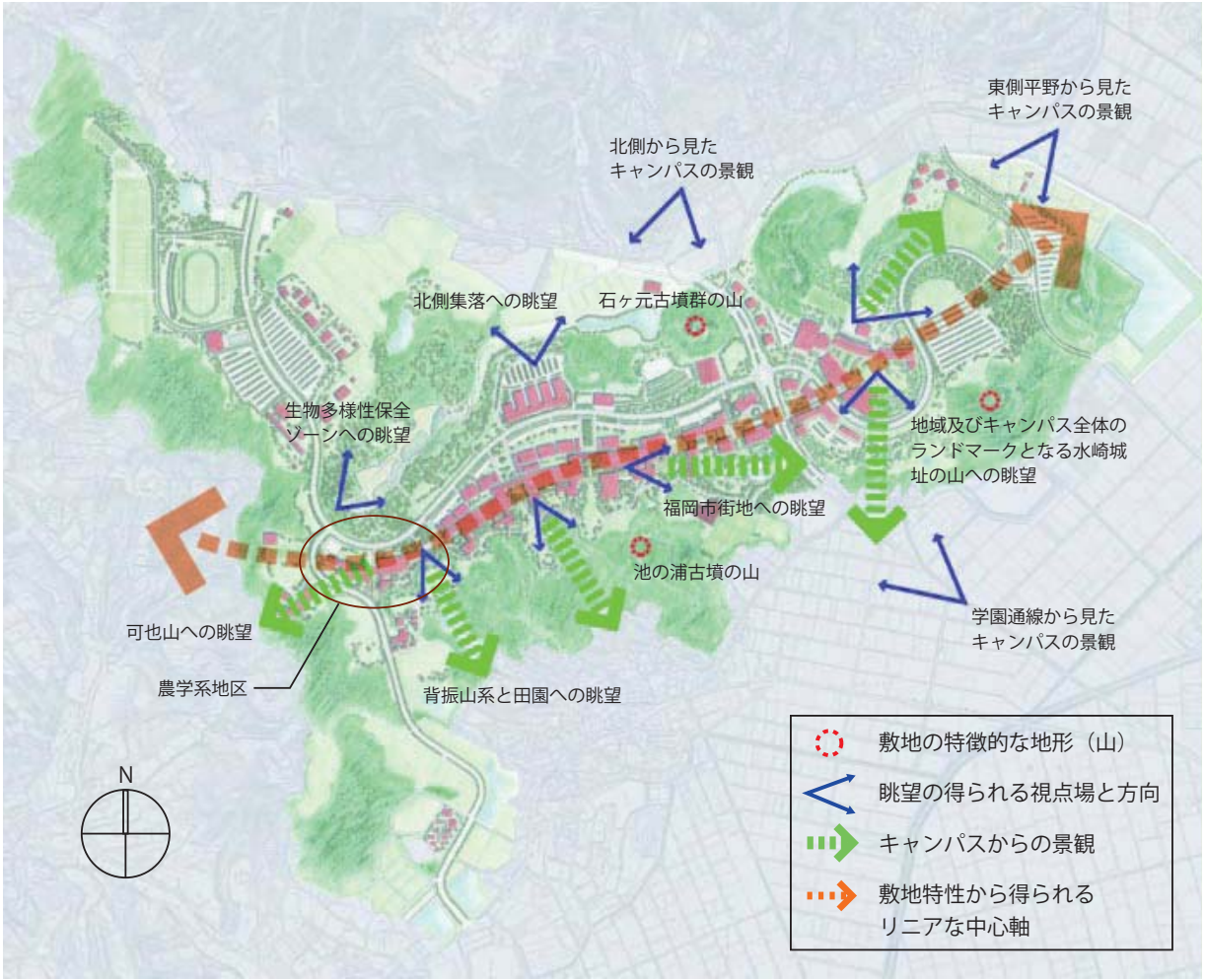


図1-2-1　敷地分析図

（１）敷地形状

眺望と景観

起伏のある敷地形状により、博多湾、福岡市街地、背振山系と田園、地域のランドマークである可也山などの特徴的遠景要素をキャンパス内から望むことができる。さらに、水崎城址の山は、地域およびキャンパス全体のランドマークであり、その眺望への配慮が必要である。

また同時に周辺からの、キャンパス内の施設群が創り出す景観と周囲の山並みや集落等との調和に配慮が必要である。

地形との調和

可也山と毘沙門山を結ぶキャンパス中央を貫く東西軸と、尾根・谷・保全緑地等の地形が織りなす地理的特徴から、東西を一体的につなぎ、周辺地形になじむ自然なキャンパスの中心軸が導かれる。

（２）保全すべき資源

キャンパス用地内には、前方後円墳・円墳等の歴史的環境資源、生物多様性保全ゾーンや緑地等の自然環境資源など保全すべき環境資源が点在している。

図1-2-2　新キャンパス位置図

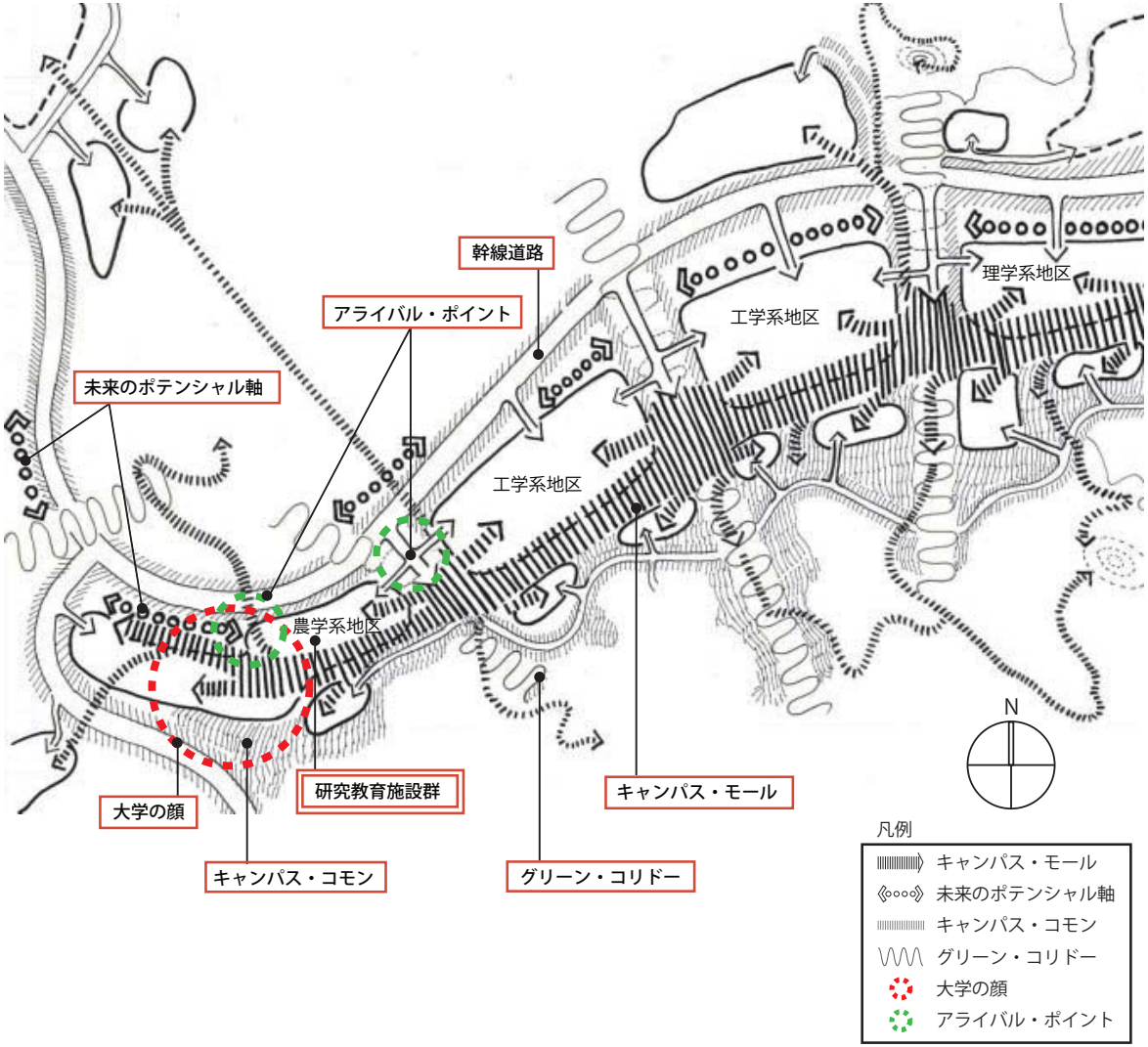


図1-3-1　マスタープランをふまえた農学系地区の骨格形成の概念

マスタープランで定められた新キャンパスを形成する骨格の考え方を農学系地区基本設計においても継承し、研究教育施設群とともに空間を構成する。

（1）キャンパス・モール
- 学際的な研究教育活動をつなぐ連続的な空間軸
- キャンパス内の歩行者動線の中心軸

（2）未来のポテンシャル軸
- 未来を拓く戦略的施設群が立地する連続した空間軸

（3）幹線道路
- 自動車交通や設備インフラストラクチャーのルートとしてのキャンパスの動脈

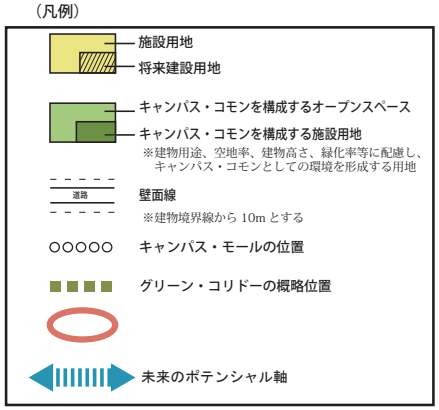
（4）キャンパス・コモン
- アカデミック・ゾーンの南に連続する開放的なオープンスペース群
- 寄附施設等の全学的利用施設の立地用地
- 未来へと継承していく象徴的空間

（5）グリーン・コリドー
- 北に位置する生物多様性保全ゾーンと南側緑地との連携を強化し、南の尾根筋に小動物が移動可能となるよう、現状植生を考慮した照葉樹林の密生とする。
- 東西に長い敷地を適度なスケールで分節する緑の空間

（6）大学の顔
- 学外からの来訪者のアプローチと大学のアカデミックな空間が初めて出会う場所
- ランドスケープ・デザインと建築設計を一体に捉えた空間構成により、象徴的なゲート性を持つ空間

（7）アライバル・ポイント
- 幹線道路から、各研究教育施設もしくはキャンパス・モールに自動車交通が寄り付く場所
- 各領域のゲート空間としての象徴的空間

図1-4-1　マスタープランをふまえた土地利用方針と農学系地区基本設計範囲の区分



(1) 土地利用方針

マスタープランにおいて敷地の中から保全緑地を確保したうえで定義された有効敷地範囲を、農学系地区基本設計の土地利用の対象とする。施設用地、オープンスペース等の範囲の設定については、以下に定義する。

(2) 対象範囲

農学系地区は、隣接する工学系地区からの連続性を尊重し、さらに農場ゾーン・南地区との連続性に配慮しながら計画する。

中心軸であるキャンパス・モールに沿って南側にキャンパス・コモン、北側に未来のポテンシャル軸を配置する。

本計画においては、農学系施設のうち、図1-4-1に示す対象地区に建設予定の建物及び周辺ランドスケープを対象とするものであり、農学系別棟施設及び農場関連施設については別途計画を行うものとする。

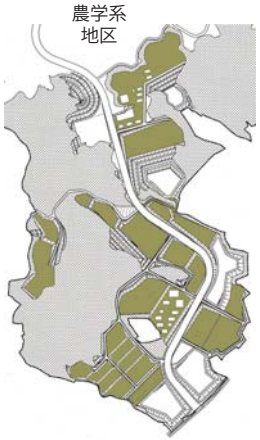


図1-4-2　農場ゾーン・南地区

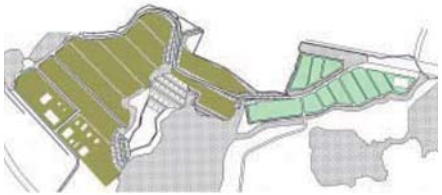


図1-4-3　農場ゾーン・北地区

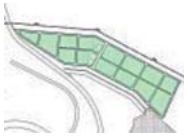
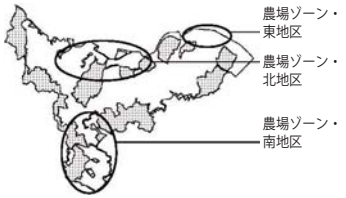


図1-4-4　農場ゾーン・東地区



キープラン

出典：マスタープラン2001より

（３）施設のボリュームと土地利用計画の方針

研究教育棟の位置について、Ａ案・Ｂ案それぞれの特性を下記に示す。

Ａ案

・工学系地区との連続的な整備が可能

・平坦でまとまった土地の利用が可能

Ｂ案

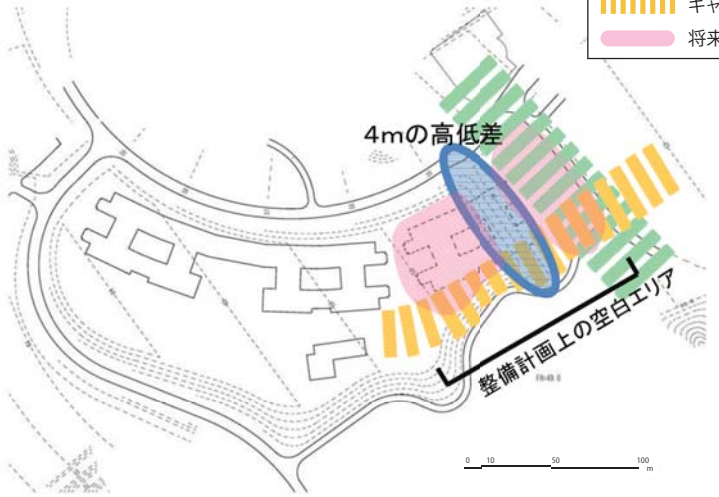
・他地区との空間的分断

・敷地の高低差による土地利用の制約

上記特性を考慮してＡ案に決定。

Ａ案

Ｂ案



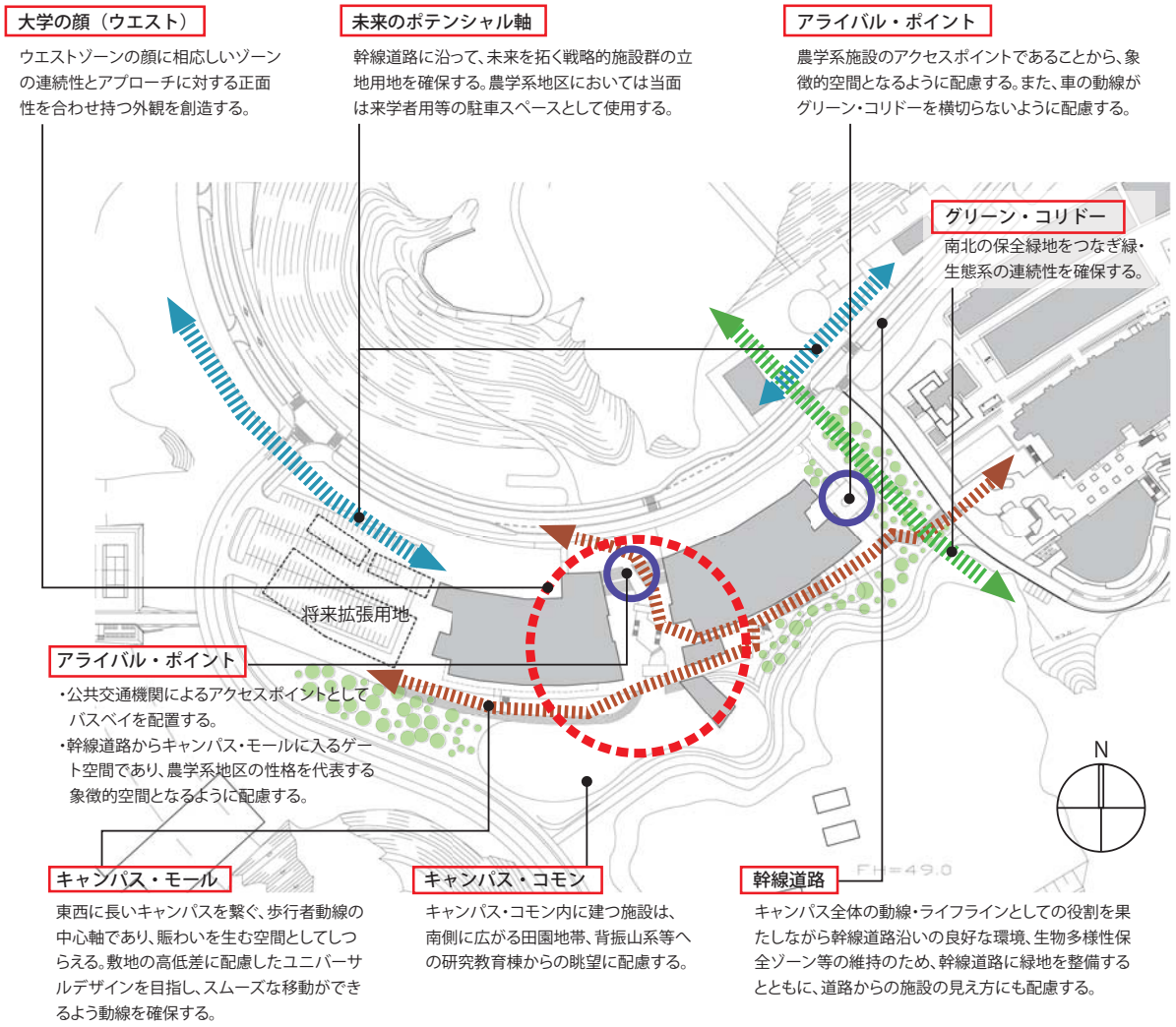


図1-5-1　農学系地区基本設計における条件となる骨格と考え方

（1）施設配置の考え方

マスタープランにおける土地利用の方針やキャンパスの骨格による南北それぞれの空間の特性を把握し、施設の適切な配置を行う。

キャンパス・モール北側の空間特性
- 流動化を促す柔軟に変化する空間
- 研究教育活動が展開する緊張感のある空間

キャンパス・モール南側の空間特性
- 新たな伝統を創り出す象徴的空間
- 賑わいと憩いのリラックスする空間

大学の顔としての空間特性
- 南側アプローチからの視線を受け止める正面性を持った空間
- 幹線道路からキャンパス・モールに入るゲート空間

（2）マスタープランをふまえた農学系地区基本設計における重要事項

農学系地区基本設計においては、マスタープランの中で空間モデルとして設定した土地利用計画について、更なる詳細な検討を進め、以下のように土地利用を行う。

キャンパス・コモン

農学系地区における研究教育施設のボリュームと調和したオープンスペースを確保する。

未来のポテンシャル軸

未来を拓く戦略的な土地利用を図る空間として位置づけるが、当面駐車スペースを配置する。

将来拡張用地

将来の増築可能スペースを確保する。

（1）シークエンスの変化に富んだ「キャンパス・モール」

人間主体の快適で賑わいのある空間形成を目指す。全体として緩やかな勾配をスロープ、階段の併用で処理し、沿道の研究教育棟の低層部とオープンスペースが一体となった、それ自身楽しめる歩行者優先の空間とする。

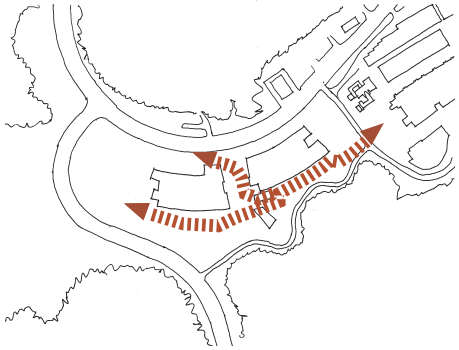


図1-6-1　キャンパス・モール

（2）場所の特性を活かした「グリーン・コリドー」

生態系の連続性を保持するために、農学系地区南北の周辺緑地を繋ぐグリーン・コリドーは、各場所の地形特性、周辺自然環境及び施設配置計画を考慮する。

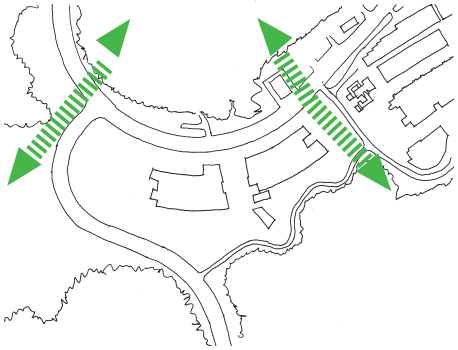


図1-6-2　グリーン・コリドー

（3）多様な欲求を充足させる様々な場の形成

学生・教職員あるいは来訪者の多様な欲求を充足させるキャンパス環境を形成するため、出会い、休息、語らいのために人々が集うことができる「場」をしつらえる。

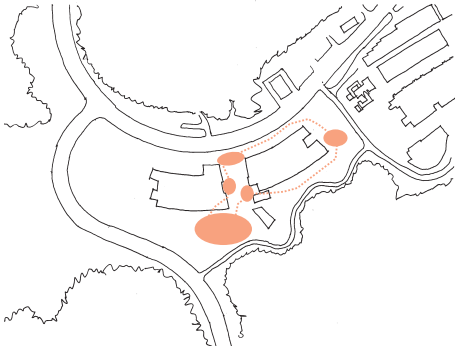


図1-6-3　様々な場の形成

（4）建築とオープンスペースの融合

吹抜けやピロティによる空間は外部空間を引込むことで、光と風を感じることができ、また賑わいのある、建築とオープンスペースとの融合空間を表現する。

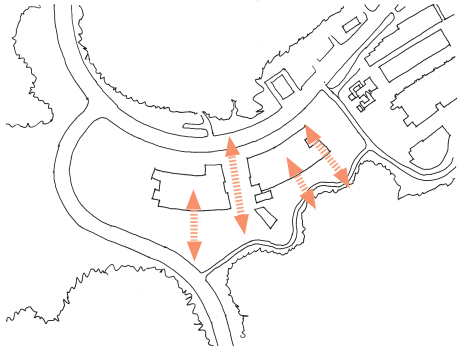


図1-6-4　建築とオープンスペースの融合